

# 彩遊祭楽

三谷市民文化振興財団ニュース



## 福井の郷土料理

### ほうばめし

昔、集落の田植えが終わるとそのお祝いとしてふるまわれた「ほうばめし」。朴葉で熱いごはんを甘いきな粉を包み、重しをかけてつくる。朴葉を使うことにより、ご飯に香りがよく馴染み、持ち運びができて保存もしやすい。そのため、お祝いの席だけでなく、田植えとの合間のエネルギー補給としても食べられた。また、きな粉は稲穂が実る稲花粉に似ていることから、豊作祈願として使われたとも言われている。



### ぼっかけ

根菜や糸こんにゃくなどの具たくさんのおいしい汁を、炊き立てのごはんにかけて食べる郷土料理で、県内では100年以上前から食べられている。汁をごはんにつっかけ（ぼっかけ）るのが名前の由来と言われ、具材や食べ方、味付けは地域によってさまざまである。勝山市のように、ごはんには赤いかまぼこや三つ葉の入った出汁をかけ、わさびや海苔を添えるお茶漬けのような食べ方もあり、おなじ「ぼっかけ」には見えないほど違いがある。



### 赤かぶらの酢漬け

800年以上前より福井市美山地域で盛んにつくられている伝統野菜「河内赤かぶら」。平安時代、戦に敗れた平家の落人がこの村に住み着き、平家の象徴である赤色のかぶらを後世に残したいとの思いで、赤かぶらの種と栽培技術を村人に伝承したとの伝説が残っている。「赤かぶらの酢漬け」は、酢と皮の色が反応して中まで真っ赤に染まり見た目が綺麗で、味や食感がよくなり保存もできる、赤かぶらの代表的な郷土料理である。



### せいげ

冬の味覚である越前ガニの中で、「せいこがに」と呼ばれる雌のズワイガニを使った郷土料理。南越前町河野地区で昔から食べられており、各家庭それぞれのレシピがある。かつては出荷されずに主に地元で食され、冬には毎日食卓にのぼる庶民の味であった。「せいげ」はせいこがにの足など大根おろしを味噌で煮て、ごはんにかけてたり、酒の肴にしたりするアレンジ料理で、甲羅から出汁がよく出て美味である。



出典：農林水産省Webサイト <https://www.maff.go.jp/>

## 一般財団法人 三谷市民文化振興財団

〒910-8571 福井県福井市豊島1-3-1 三谷ビル  
TEL：0776-20-3188 FAX：0776-20-3306

2022年6月発行・このニュースに関するお問い合わせは、☎03-6451-0536 ホーピスト(株) まで

## ふくいの無形文化財

### 賀茂神社 陸月神事 2月第3日曜日 (4年に一度)

福井市大森町の賀茂神社の氏子が、その年の五穀豊穡、天下泰平を予祝して演じる田遊びの一種で、700～800年の伝統を持つと言われ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。神社参拝後、みこしを中心に行列を整えた氏子たちは祭場まで練り歩き、明神参り、油おし等の行事を行った後、米俵4俵の上に戸板を載せた舞台上、色鮮やかな装束の幼少年が古式豊かな舞いを披露する。(福井市)



## ふるさとめぐり 第14回 福井市

### 伝説

#### …九頭竜川伝説…



九頭竜川の名の由来には諸説がある。1100年ほど前、平泉寺の白山権現が姿を現し尊像を川に浮かべると、九つの頭を持った竜が現れ、尊像を頂くようにして川を流れ下り黒竜大明神の対岸に泳ぎ着いた。以来、この川を「九頭竜川」と呼ぶようになったという説の他、天地創造の頃にいた神が、国土を譲るために国の四隅、東は常奥の鹿島、西は安芸の厳島、南は紀伊の熊野、そして北は越前の崩山の黒竜大明神に四神を置き、この黒竜大明神の祭神が黒竜王であったため、その前を流れる川が黒竜川（くずりゅうがわ）と呼ばれるようになったという説もある。また古くから氾濫を繰り返すため崩れ川とも呼ばれており、それがいつしか九頭竜川になったという説もある。

#### 🚗 九頭竜湖に行く

#### 九頭竜湖

■北陸自動車道福井ICから車で90分。  
東海北陸自動車道白鳥JCTから車で10分

## 句碑

名月の

見所問ん

旅寝せん

松尾芭蕉

「世に知られた名月の名所を教えてください。一緒に月を楽しみ旅寝しようではないか」。福井の俳人洞哉を訪れた際、芭蕉は洞哉と連れ立って、名月を見るために敦賀へ向けて旅に出たという。



#### 🚗 句碑に会いに行く

左内公園 ■住所：福井市左内町7-20

# 一般財団法人 三谷市民文化振興財団 助成団体募集!!

募集期間：2022年10月1日～11月30日

一般財団法人 三谷市民文化振興財団は、福井県内におけるボランティア活動、スポーツ活動、市民文化活動の振興を通じて「こころ豊かな地域づくり、社会づくり」に貢献することを目的として、2022年度の助成団体の募集を行います。

## 募集の要領

- 助成の対象分野
  - ・ボランティア活動
  - ・スポーツ活動
  - ・市民文化活動

## ●助成の対象となる団体

■営利を目的としない次の条件を満たす団体

1. 福井県内で活動している団体
2. 会員が5名以上の団体
3. 設立1年を経過している団体  
(2021年10月以前に設立したもの)
4. 特定の資格・経歴等の条件を必要としない、個人で加入できる民間の団体

●助成金額 1件あたり約20～50万円(昨年度上限30万円から増額)

●応募方法 所定の申請書をご郵送またはご持参ください。

●結果連絡 選考委員会による審査で決定し、2022年12月末までに団体代表宛に連絡いたします。  
(採否の理由に関するお問い合わせには応じ兼ねます。)

●助成金贈呈時期 2023年1月中旬

上記より詳しい募集要領がございます。  
以下にお問い合わせをしてから、ご応募ください。

## まずはお問い合わせを!

★ホームページから募集要領を読む

三谷市民文化振興財団のホームページへアクセス  
<http://www.mitene.or.jp/m-zaidan/promo.html>  
または検索エンジンで!

三谷市民文化振興財団

検索

★お電話で募集要領を取り寄せる

☎ 0776-20-3188 (一財) 三谷市民文化振興財団



■連絡先 ひいろの会 山口 090-5681-9211

越前陶芸村にある福井県立陶芸館の陶芸教室終了生が中心となって設立された同会は、来年30周年を迎える。13年前には陶芸家の廃業で壊される予定だった窯(左近窯)を譲り受け、福井県生活学習館(ユアアイ・ふくい)をメイン例会会場に、日展・県美展・市美展の入選・入賞作家を始め、「陶芸をやってみよう。世界でただ一つの花瓶、器やオブジェなどを創作したい」という人々も加わり、会員相互で工夫しながら新しい創作技術と格闘し、個性豊かな作品を作り続けている。

ひいろは「火の色」「緋色」から命名したもので、焼き物の神秘さを作り出す大元である「炎」「火」を指す。現在の会員数は約40名。例会の見学もできるので、陶芸でワクワク感を味わいたい方は是非お問い合わせを。

## 三谷市民文化振興財団の助成団体



■連絡先 小浜海洋少年団 本村 090-3888-8145

小浜市は古くから日本海側の要港で、北前船の行き交う城下町として栄えた。小浜海洋少年団は創立60年を経過した歴史ある団体で、手旗、ロープワーク訓練、カッター、カヌーなどの海洋訓練を基本に、体験航海など海に関する様々な体験活動を通じて、積極性、自発性、集中力を養うことを目的としている。団長をはじめとしてOB、元教育者、海上保安官らが指導にあたり、日々の活動を通じての団員の成長には保護者からの感謝が絶えず、兄弟姉妹で入団している子供たちもいる。

毎年3月には活動の場である若狭高校海洋キャンパスで行われる海岸美化運動に参加し、清掃奉仕活動を通じた地域貢献の他、夏には日本水難救済会の青い羽根募金に協賛して、募金活動を実施している。

福井市

## 「越前陶芸村・ひいろの会」 伝統の越前焼きを守りつつ、個性豊かな作品作りを楽しむ

「組子細工はおもしろい」と朗らかに話す土本さんは、細かな木片を組み合わせる組子細工作家だ。しかも組子の隙間を埋める網代組みを考案し、独自の作品作りを続けている。

土本さんは幼少時からもの作りが好きで、高校に通いながら障子や襖などの建具仕事に従事した。そこで組子の美しさや細かな作業工程に惹かれたという。例えば1ミリの木片を10分割し組み上げていく緻密な作業に、おもしろさを見出した。組子を追求したくて19歳で埼玉県にある建具工芸研究所へ。

「建具は建築物の一部分ですが、組子は持ち運びもできる独立した製品。『綺麗』ではなく『美』を表現したいのです」。

25歳で地元に戻って創作を始め、福井県内の美術展で何度も入賞。自信満々で全国の展示会に出品したが、落選の連続だったとか。

「レベルの高さに驚くも、落ち込むことはありませんでした。むしろ、まだまだ進歩できる、挑戦できると意欲が高まりましたね」。

木工芸や組子細工の匠に技術を学びつつ、一方で他分野との交流も重ねる土本さん。その理由は、多くの方からいろいろな見方や考え方を学び、創作のヒントも得られるから。



難しいからおもしろい。  
組子細工を持つ『美』を求めて、  
挑戦と創作を続けていく。

# 土本保

小浜市

## 「小浜海洋少年団」 海に親しみ、海に学び、海に鍛える



展示会で説明するためのセンチ・ミリ単位の組子パターン。



木組みとは思えない滑らかな表面の神代杉象嵌飾箱(左)と神代杉組紋飾箱(右)。「夢を入れてほしい」と土本さん。

アイデアが詰まった土本さんの頭の中では常に図面がひかれ、展開図から組み立てまで行われているよう。

「頭の中ではほぼ完成しているから後は作業に集中するだけ」と、今も様々な美術展や工芸展に出品し続けている。そして受賞に満足することなく、次回作が始まっている。

「思った通りにできないことが辛いのではなく、それがおもしろい。おもしろいから続けられる。作品を残すことは、私に教えていただいた方への恩返しだと思っています。もちろん、技の継承もしていきたい。継承する方には、単なる技の習得だけでなく、私がそうだったように、多くの方から話を聞き、経験を通して、生き方が反映される作品を作ってほしいです」。

73歳の今なお新作を考案し続ける土本さん。作品を通じて、私たちが知らない組子細工の美しさを伝えてくれる。